

# JACET-Kanto Newsletter

一般社団法人大学英語教育学会関東支部

March 31, 2015 No.4

## JACET 関東支部ニューズレター第 4 号 (WEB 版) 刊行に寄せて

支部長 木村松雄 (青山学院大学)

JACET 関東支部ニューズレター (WEB 版) 第 4 号をお届け致します。関東支部ニューズレター委員会委員長の高木亜希子先生 (青山学院大学) と副委員長の下山幸成先生 (東洋学園大学) を初めとする委員会の先生方と関東支部を支え運営して下さる多くの先生方の不断のご理解とご尽力にまずもって衷心より御礼申し上げます。

ご存知の通り、2013 年度より学術研究発表は「関東支部紀要」(*JACET-KANTO Journal*) に掲載し、それ以外の活動報告は「ニューズレター (WEB 版)」(年 2 回発行) に掲載致しております。今回は、2014 年度の第 2 回目 (通算第 4 回目) のニューズレターとなります。

前号の[ニューズレター \(第 3 号\)](#)では、主に[関東支部大会 \(第 8 回\)](#)「大学の国際化とグローバル人材育成」(Globalization in Higher Education and Human Resource Development) での成果を

「基調講演 (明石康先生: 公益財団法人国際文化会館理事長・元国連事務次長)」と同テーマで実施した全体シンポジウムを中心に振り返りました。講演終了後、多くの方々より、基調講演の文字化への要望がありましたが、幸い明石先生より特別のご許可を頂き、「基調講演」を全て文字化したものを次号の「JACET 関東支部紀要」に「特別寄稿」として掲載できることとなりました。「紀要第 2 号」がお手元に届きましたら、是非他の論文と同様ご高覧頂ければ幸甚です。また掲載をお許し下さった明石先生に改めて御礼申し上げる次第です。

さて本号では、年間 3 回実施している「[月例研究会](#)」と年間 5 回実施している「青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会」を講演者と演題を中心に簡単に振り返ってみたいと思います。「月例研究会第 1 回」の講師は藤尾

### 目次

・ 巻頭言 支部長 木村松雄 .....	- 2 -
・ 第 2 回支部総会報告 支部事務局幹事 高木亜希子 .....	- 2 -
・ 月例研究会報告 月例研究委員会委員 河内山晶子 .....	- 4 -
・ 青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会報告 支部会員 辻りこ .....	- 5 -

・ 支部研究会活動報告 (2014 年度) 各研究会代表 .....	- 7 -
・ 支部大会運営委員会からのお知らせ 支部大会副運営委員長 新井巧磨 .....	- 15 -
・ 支部紀要編集委員会からのお知らせ 支部紀要編集委員長 伊東弥香 .....	- 15 -
・ 事務局だより 支部事務局幹事 高木亜希子 .....	- 16 -

美佐先生（東洋大学）、演題は「言語能力とコミュニケーション能力の落差：コミュニケーションを成功に導く能力とは？」でした。「月例研究会第2回」の講師は川成美香先生（明海大学）、演題は「グローバルな英語コミュニケーション能力の到達基準を求めて：CEFR 準拠のJS「ジャパン・スタンダード」の策定と実践」でした。そして「月例研究会第3回」の講師は斉藤一弥先生（早稲田大学）、演題は「日本人英語学習者が目指すべきスピーキング能力とは何か：発音・流暢さ・語彙・文法の観点から」でした。月例研究会（委員長：藤尾美佐先生（東洋大学）の先生方が時間を掛け準備頂いている成果が毎回確かに得られる優れた研究会になっているかと思えます。改めて、月例研究委員会の先生方とご講演頂いた講師の先生方に衷心より御礼申し上げます。

「青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会」（年5回）は以下の先生方が魅力あるご講演をして下さいました。「第1回共催講演会」の講師は池田真先生（上智大学）で、演題は「CLIL が切り拓く日本の英語教育」でした。「第2回共催講演会」の講師は佐野富士子先生（横浜国立大学）で、演題は「SLA 研究最前線：英語教師に必要な第2言語習得論」でした。「第3回共催講演会」の講師は小張敬之先生（青山学院大学）で、演題は「CALL 研究最前線：クラウド環境の中で学ぶ反転授業とブレンド型の英語教育—Dominus illumination mea—」でした。「第4回共催講演会」の講師は酒井英樹先生（信州大学）で、演題は「第二言語習得からみた英語指導：インプット、インタラクション、アウトプット、フィードバックの観点から」でした。そして「第5回共催講演会」の講師は中山夏恵先生（共愛学園前橋国際大学）と栗原文子先生（中央大学）で、演題は「グローバル時代に求められる異文化間能力—英語授業における現状と課題」でした。

「月例研究会」（全3回）と「共催講演会」（全5回）の演題を見ると実に多彩であることが分か

ります。どちらとも会員の要望を聞きつつ、担当の先生方が、各研究分野において「今最も旬な研究者」に御願いをして、実施しております。その甲斐あってか、毎回反響は大きく、関東圏のみならず国内いろいろなところから参加者があり、全8回の参加者数は、概算で500名程度になるかと思えます。熱心な会員の参加と討議こそが学会が行う講演会の生命線ではないかと思えます。2015年度も、「月例研究会」を3回、「共催講演会」を5回開催すべく、既に準備に入っております。皆様のご要望に答えるべく、様々なそして魅力ある講演会を企画して参りますので、どうぞ今後共積極的な参加を御願い申し上げます。

## 第2回支部総会報告

支部事務局幹事

高木亜希子（青山学院大学）

2014年11月8日（土）に、早稲田大学14号館801教室に於いて、2014年度第2回支部総会が開催されました。支部総会では、2015年度の事業計画、予算案、支部人事の報告と承認が行われました。以下に内容を記載いたします（なお、予算案は省略）。

### ■2015年度事業計画■

I. 大会、セミナー等の開催（1号事業）

(1) 支部大会の開催

名称：2015年度関東支部大会

日時：平成27（2015）年7月12日（日）

場所：青山学院大学

規模：約300名

(2) 支部講演会の開催

名称：青山学院英語教育研究センター・JACET  
関東支部共催英語教育講演会

日時：平成27（2015）年4月、9月、10月、12月、平成28（2016）年1月の5回を予定

場所：青山学院大学

内容：

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の研究者達による、最新の研究成果や知見を発表する講演会を定期的実施する。
- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界で英語コミュニケーションに携わっている専門家にも、講演を依頼する。

規模：毎回約 60 名

### (3) 支部月例研究会の開催

名称：関東支部月例研究会

日時：平成 27 (2015) 年 5 月、6 月、11 月の 3 回を予定

場所：青山学院大学

内容：

- ・英語教育及び関連する分野にて、現在活躍中の研究者達による、最新の研究成果や知見を発表する講演会を定期的実施する。
- ・英語教育をより実践に結びつけるため、実業界で英語コミュニケーションに携わっている専門家にも、講演を依頼する。

規模：毎回約 40 名

## II. 『紀要』『支部ニューズレター』等の出版物の刊行 (2 号事業)

### (1) 『JACET 関東支部紀要』第 3 号 (英語名：*JACET-KANTO Journal*)

日時：平成 28 (2016) 年 3 月 31 日

規模：約 1100 冊

### (2) 「JACET 関東支部ニューズレター」第 5・6 号

日時：平成 27 (2015) 年 9 月、平成 28 (2016) 年 3 月の 2 回を予定

目的：

- ・支部の最近の動向を知らせることで支部会員の帰属意識を向上する。
- ・英語教育の関連情報の発信により支部会員の研究活動を支援する。

※JACET 関東支部 HP に pdf で掲載

## III. その他 (5 号事業)

### (1) 支部総会の開催

名称：2015 年度第 1 回、第 2 回関東支部総会

日時：①平成 27 (2015) 年 7 月

②平成 27 (2015) 年 11 月

場所：青山学院大学

目的：①2014 年度の関東支部の活動、会計報告、および 2015 年度の関東支部の活動計画、予算案および人事案を示す。

②2016 年度の関東支部の活動計画、予算案および人事案を示す。

### (2) 支部役員会の開催

名称：関東支部運営会議

日時：平成 27 (2015) 年 4 月、5 月、6 月、9 月、10 月、11 月、12 月、平成 28 (2016) 年 1 月、3 月

場所：青山学院大学

目的：支部の運営における審議、計画の立案

## ■2015 年度支部人事■

### (1) 研究企画委員 (45 名)

新井巧磨、飯田敦史、伊東弥香、伊藤泰子、今井光子、上田倫史、遠藤雪枝、大崎さつき、大野秀樹、大矢政徳、奥切恵、長田恵理、大和田和治、小田眞幸、小張敬之、加藤忠明、金指崇、川口恵子、清田洋一、熊澤孝昭、河内山晶子、小屋多恵子、斎藤早苗、酒井志延、笹島茂、佐竹由帆、佐野富士子、下山幸成、鈴木彩子、関戸冬彦、高木亜希子、田口悦男、武田礼子、辻りりこ、寺内正典、中山夏恵、濱田彰、星野由子、藤尾美佐、古家貴雄、山口高領、山本成代、Brian Wistner、Chad Godfrey、Paul McBride

※2015 年度より任期は 2 年間

### (2) 2015 年度からの新研究企画委員

・支部大会運営委員会

飯田敦史 (群馬大学)、辻りりこ (青山学院大学)

・支部紀要編集委員会

武田礼子（青山学院大学）、濱田彰（帝京科学  
大学）、Chad Godfrey（埼玉医科大学）、Paul  
McBridge（玉川大学）

## 月例研究会報告

月例研究委員会副委員長  
河内山晶子（明星大学）

### ■月例研究会 11 月報告■

日時：2014 年 11 月 8 日（土）16:00-17:20

場所：早稲田大学 14 号館 801 教室

題目：「日本人英語学習者が目指すべきスピー  
キング能力とは何か：発音・流暢さ・語彙・  
文法の観点から」

講師：齊藤一弥（早稲田大学）

「どうしたらネイティブのように英語がペラペラ  
になれますか？」とは学習者がしばしば訊いて  
くる質問である。講演はまず、「これが日本人学  
習者にそもそも可能なことなのか？そしてそも  
そも第二言語話者がそのようなネイティブライ  
クな英語を身につけることが本当に必要なの  
か？彼らにはいったいどのような発話能力が必  
要なのか？さらにはぺらぺらの正体、つまり『ス  
ピーキング能力の本質』とは何なのか？」とい  
う問いから始まった。

その答えとして講演者は、学習者とその指導者  
が目標とすべきスピーキング能力とは、あくまで  
「第二言語話者として」相手が自分を十分理解  
できるような発話の力であると述べ、その理解し  
やすさのレベルを上げていくためには何が重要  
なのかを十分に踏まえた上で学習や指導がなさ  
れるべきであるとした。その根拠として先行研究  
や講演者らによる最近の研究での発見の数々が  
具体的に示された。

Munro らは 1990 年より英語発話データを「ア  
クセント」と「理解しやすさ」の 9 段階で測定す

る研究を行い、2 つの観点のどちらの方が重要な  
のかを分析した。その結果、前者より後者のほう  
が重要である、つまり英語の習得では「ネイティ  
ブのような発音者」になることよりも、「相手に  
理解される発話ができる第二言語話者」になるこ  
との方が重要であり、「理解しやすさ」がコミュ  
ニケーションの成否を決める要因であることが  
わかった。

以上を踏まえ、講演者らの研究 (Saito et al., 2015,  
in *Applied Psycholinguistics*) では、「理解しやすさ」  
のためには、音声、流暢さ、語彙、文法といった  
言語的要因のうちのどれが大きく関与している  
のかを調べた。データは、海外に渡航して 1 か月  
未満の初級者から、英語圏に 10 年以上滞在し、  
日常的に英語を使って仕事をしている上級者ま  
での日本人 120 人の発話（初級 40 人、中級 40  
人、上級 40 人）である。分析において、音声上  
の要因としては「セグメント」、「ストレス」、「イ  
ントネーション」を、流暢さの要因としては「速  
さ」を、語彙上の要因としては「適正さ」、「豊か  
さ」を、文法上の要因としては「正確さ」、「複雑  
さ」を観点とし、それらと「アクセント」及び「理  
解しやすさ」の間の相関関係を調べた。

すると、「理解しやすさ」の方は、ほぼすべての  
の要因と有意な相関があったのに対して、「アク  
セント」の方は、一要因（セグメント）を除いて  
はほとんど全ての要因との相関が認められな  
かった。また、測定した 8 要因の強さを比べたこ  
ろ、初級者と中級者を差異化したのは「流暢さ」、  
「語彙的適正さ」であったのに対し、中級者と上  
級者を差異化したのは、「セグメント」、「文法的  
正確さ」であった。

このことから、「理解しやすさ」を目指すには、  
上述のような様々な言語的スキルをバランスよ  
く鍛える必要があること、さらには指導の際に学  
習者を初級から中級へ押し上げるには、「流暢さ」、  
「語彙力」と「ストレス、イントネーション」に  
特に焦点を当てて指導し、中級から上級へ上げる

には、「セグメント」、「ストレス、イントネーション」、「文法力」に焦点を当てるのが効果的であることが示唆された。

10分間のQ&Aでは4つの質問と1つのコメントが出て、いずれも講演の核に関わるものであった。それらに対する回答は、本研究ではディスコースの分析はあえてしていないが今後はそれも視野に入れた分析をしたいこと、シンガポール人等は「ネイティブか否か」というだけの識別では語り尽くせないこと、内容語と機能語を区別すれば初見文においても流暢さは増すこと、スケール評価での判定者によるブレが問題なのはもちろんだが、それより肝心なのはデータ・レンジの広さであって、その点は優れていることが述べられた。

コメントとしては、「非常に内容の濃い研究に触れて刺激された」「明日の授業にすぐにも役立つアイデアを多く得た」との感想が異口同音に聞かれた。短時間の中にも、様々な研究の詳細を聞くことができ、あたかも複数の発表を聞いたような、満足度の高い講演であった。

## 青山学院英語教育研究センター・JACET

### 関東支部共催講演会報告

支部会員

辻りこ（青山学院大学大学院生）

#### ■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会（第3回）報告■

日時：2014年10月11日（土）16:00-17:30

場所：早稲田大学14号館801教室

題目：「CALL 研究最前線：クラウド環境の中で学ぶ反転授業とブレンド型の英語教育 -Dominus illuminatio mea-」

講師：小張敬之（青山学院大学）

本講演では、英語の授業の三本柱として、ICT、英語力、国際コミュニケーションの秘訣（世界

観・神観・宇宙観）が述べられ、その上で、経済学部一年生を対象にした研究について報告された。研究の結果、TOEICの伸びも見受けられ、92%の学習者が、英語での発表に関して、英語力の向上を実感していることが分かった。そこに至るのに、学習者は、最終的に15の世界遺産をグループで調べて発表する準備の為にオンラインでの調べ学習やパワーポイント作成を行い、更にNEWTON e-learning、ATR CALL Brix、TED Talks、Globalvoice CALLを使用し、授業、課外活動の両方が繋がる反転授業を受けた。このようにデジタル教材を使用する上での利点は、コンテンツが豊富なこと、反転授業が可能になること、学習や指導の履歴を残せることなど多くあり、今後のデジタル教材の活用は期待できるという興味深い結果が報告された。

講演の後半では、世界観、神観にも触れられ、授業の柱になる部分である国際コミュニケーションの秘訣について述べられた。その上で、英語学習方法の変化に対応した、ブレンド型の協働学習や、Social mediaを利用した発信型の英語教育等の実践的な英語授業に関して述べられ、日本の英語教育のICT利用について具体的且つ明示的に実践研究が発表された。これは、学習者のプレゼンテーション能力を向上させるだけでなく、TOEICの点数にも伸びが確認され、今後の英語教育における具体的な教育的・研究的示唆を提示したものであった。

21世紀の国際人には、単に英語を話すだけでなく、核になる信念、ICTの使用、共感等といったような要素が求められている。ICTを用い、面白いと思わせる、遊び感覚を取り入れた英語教育を目指すということや、face to faceのコミュニケーションを授業の最後に持っていくために、その下地を学習者がコンピューターを使用するなどといった、実践を促す本講演は、多くの教育関係者が今後教育や授業について考えていく上で具体的なヒントとなるものであった。

## ■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会（第4回）報告■

日時：2014年12月13日（土）16:00-17:30

場所：青山学院大学総研ビル11階第19会議室

題目：「第二言語習得研究からみた英語指導：インプット、インタラクション、アウトプット、フィードバックの観点から」

講師：酒井英樹（信州大学）

具体的な実践と研究理論の両方を融合させ、第二言語習得研究からみた英語指導に関する講演がなされた。本講演の前半では、文法形態素や統語（疑問文や否定文）に関する研究結果が示された。対象者は中学生や大学生も含めており、理解と表出の発達段階は異なる事を提示し、学習者が英文の意味を理解しているということが必ずしも、文法能力を持っているとは限らないことが報告された。

近年発展してきている言語学習に関する理論、教授法、言語に関する理論等について概観された後、第二言語習得理論のインプット仮説、アウトプット仮説、インタラクション仮説について簡潔に分かりやすく述べていただいた。講演では、これら三つの仮説に関する研究結果が提示され、さらに外国語活動への示唆へと展開した。理解できる英語を用い、学習者に語りかけること、情意フィルターを下げること、発話のタイミングを見計らうことなどを教師側は留意する必要があることが報告された。具体的には、リーディングの際、理解に焦点を当てさせ、相互作用を起こしながら、生徒が困難と感じるところを英語でなんとか理解させることや、アウトプットでは、教師や他の生徒が英語でフィードバックを与えることができることなどが述べられた。

このように理論と実践を関連づけた本講演の後半では、英語教師が指導する際に留意すべき7つの視点を示したメリアー・アプローチをいつ使うのか、また、児童・生徒の注意を引き、考察

させ、知識を引き出すといった相互作用の目的の再確認が行われた。加えて、生徒の知識を引き出していく Recasts をどのように行い学習者の知識を引き出していかや、今までにどのような研究がなされていたかなど、具体的且つ明示的に提示された。最後にはリーディング指導のポイントまで報告された詳細な本講演を聞き、あっという間に終了の時間になってしまったとの印象を受けた先生方が多かったのではないだろうか。

## ■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会（第5回）報告■

日時：2015年1月10日（土）16:00-17:30

場所：青山学院大学総研ビル11階第19会議室

題目：「グローバル時代に求められる異文化間能力—英語授業における現状と課題」

講師：中山夏恵（共愛学園前橋国際大学）・栗原文子（中央大学）

異文化間アプローチは、「異文化間コミュニケーション能力（ICC）の獲得を学習目標とし、言語（コミュニケーション）と文化の関係性や自文化も含めた文化の特性について意識的に、あるいは、明示的に学習する機会を与える」としており、異文化能力の育成を一つの目標にしている言語教育アプローチである。このアプローチにおいては、知識、態度、技能の三つの要素を含む異文化間能力を備えた異文化間話者になることが重視される。本講演ではこの点に着目し、現職教員の意識調査（JACET 教育問題研究会, 2014）の報告と中学校英語検定教科書分析結果に基づき、今後の授業におけるICC育成実践に向けた提案がされた。

教員によるアンケート調査によると、文化の項目は教授法など他の項目に比べ、自信がないと答えた教員が多かった。しかし、海外経験がある教員は自信がある教員に比べて、自信があると答えた割合が多かったため、教員の海外研修は必須とするこ

とが望ましく、また、教育歴との相関関係の分析結果から、ICC育成に自信を持って指導するには、10年以上の指導経験を要する可能性があるという示唆がなされた。

次に、授業内でのICC育成の現状について示唆を得るために実施された、中学校検定教科書の分析結果が報告された。分析にあたり、FREPA (Council of Europe, 2012) の記述文と J-POSTL (JACET 教育問題研究会, 2014) の文化に関する記述文を比較し共通する内容を含む 11 項目が選定され、採択率の高い 3 種の教科書全頁において ICC 記述文の観察された割合と学年毎の割合の平均、分析者間の合意率が算出された。その結果、ICC 育成を意図する箇所等は限定されており、特に、「文化への気づき」や「文化への興味」といった比較的基本的で表層的な項目が繰り返し観察された。一方、「複数の言語や文化の関連付け」や「自分以外の視点への気づき」などより深層的な文化を扱う項目はあまり観察されず、とくに 1 年生の教科書には非常に少なかった。今後、明示的な ICC 育成を目的とした教材作成や教員の ICC 研修の必要性などが指摘された。質疑応答では、日本でよく使われている「異文化間理解」という用語自体に関する議論も熱くなされ、多くの関心が寄せられた大変興味深い研究報告であった。

## 支部研究会活動報告 (2014 年度)

### 各研究会代表

#### ■教育問題研究会■

代表：久村研

本研究会では昨年度から 3 か年にわたり「英語教師のためのポートフォリオの普及と英語で授業を行う能力規準に関する実証的研究」をテーマに研究活動を続けています。研究・調査の企画立案、研究活動の運営・調整等のために、年 10 回 (於：早稲田大学 11 号館 13 階共同研究室) 研究

会を開催しました。具体的な研究成果は以下の通りです。

#### 1. 研究会誌「言語教師教育」(*Language Teacher Education*) の発刊

・目的：①本会が開発した「言語教師のポートフォリオ」(J-POSTL) (© Council of Europe 2014) の適用可能性と活用法、②言語教師教育及びその関連分野における調査・研究を通して、言語教育の発展に寄与すること。

・発行記録：

(1) [Vol. 1 No.1 \(日本語版\) \(74 ページ\) : 2014 年 7 月 20 日発行](#)

(2) [Vol.1 No.2 \(英語版\) \(98 ページ\) : 2014 年 8 月 5 日発行](#)

(3) [Vol.2 No.1 \(日本語版\) \(128 ページ\) 2015 年 3 月 15 日発行](#)

以上いずれも、Online edition: ISSN 2188- 8264, Print edition: ISSN 2188-8256 です。査読付きです。会誌及び投稿要領は以下のアドレスからダウンロードできます。

<http://www.waseda.jp/assoc-jacetedu/>

#### 2. 言語教育エキスポ 2015 の開催

日時と場所：2015 年 3 月 15 日 (日)、早稲田大学 11 号館 4 階会議室

共催：科研 (個人、共同) 16 件、学会 (支部、研究会含む) 10 件

発表件数：基調講演 1 件、シンポジウム 10 件、ワークショップ 4 件、発表 30 件

#### 3. 学会等における主な研究成果の発表

(1) 4 月 19 日 (土) 田辺応用言語学研究会 (TALK) 例会：神保・久村「英語教育が変わる『言語教師のポートフォリオ』(J-POSTL) とは何か」

(2) 5 月 31 日 (土) JALT Framework & Language Portfolio SIG：酒井、高木 “Developing and Implementing J-POSTL”

(3) 8 月 9 日 (土)・10 日 (日) 全国英語教育学会全国大会：酒井「英語教師が省察的成長をすすめるための研究」、清田「英語教育における言語

学習ポートフォリオの活用」

- (4) 8月10日(日)ー15日(金) AILA World Congress 2014 : 日蘭豪共同シンポジウム : 神保 “Overview of Research Projects on Adaptation of EPOSTL to Japanese Context”、久村 “Challenges in Adapting the EPOSTL to the Japanese Educational Context”、山口 “National Survey regarding the Development of Professional Competence of Japanese Teachers of English”、Peter Broeder (Tilburg University, Netherlands)、Angela Scarino (University of South Australia)、Kathleen Heugh (University of South Australia) / 中山・栗原 “An Analysis of Cultural Descriptors in J-POSTL (Japanese Portfolio for Student Teachers of Languages)”
- (5) 8月28日(木)ー30日(土) JACET 国際大会 : 中山・栗原 “How Intercultural Competence of Japanese Junior High School Students Can Be Enhanced: Textbook Analysis and Its Implications”
- (6) 10月24日(金)ー26日(土) The Seventh International Conference on English Language Teaching (ELT) in China : Symposium for AILA East Asia : “Pre-service Teacher Education” 神保 “Overview of English Language Teacher Education in Japan – Introduction –”、久村 “J-POSTL – a Reflection Tool for Language Teacher Education: Rationale and Structure” (JACET 本部からの派遣)
- (7) 2015年1月10日(土) 青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会 : 中山・栗原 「グローバル時代に求められる異文化間能力ー英語授業における現状と課題」、など。

## ■SLA (関東) ■

代表 : 佐野富士子  
研究会の発足 (1995年) 以来、「第二言語習得

研究と外国語教育への応用」をテーマに活動してきました。2013年に研究会の総力を結集した『第二言語習得と英語科教育法』(開拓社)を刊行した後なので、今年は会員の充電の期間でもあり、理論と実践の融合をさらに進める年でもありました。8月と3月の週末に公開輪読会を開催し、研究会会員以外の方々のご参加を得て、第二言語習得論の理論を実際の教室での英語指導にどう取り入れるかについて、活発な意見と情報の交換をしました。以下は公開講読会開催の概要です。

### ・第1回公開輪読会

日時 : 2014年8月16日(土) 10:00 – 17:30

会場 : 横浜国立大学教育文化ホール中集会室

文献 : Gass, S. M., & Mackey, A. (2012). *The Routledge Handbook of Second Language Acquisition*. London, UK: Routledge.

### ・第2回公開輪読会

日時 : 2015年3月1日(日) 10:00 – 16:30

会場 : 横浜国立大学教育文化ホール中集会室

文献 : (1) *Applied Linguistics*, vol. 35, No. 4. Special issue: Complexities and interactions of age in second language learning: Broadening the research agenda.

(2) Ellis, R. & Shintani, N. (2014). *Exploring Language Pedagogy through Second Language Acquisition Research*. London, UK: Routledge.

(3) Beglar, D. & Hunt, A. (2014). Pleasure reading and reading rate gains. *Reading in a Foreign Language*, 26, 29-48.

研究会の会員が一堂に会するのは年に2回でしたが、公開輪読会は新規の研究会会員獲得の機会ともなりました。また、会員の個人個人のJACET大会、その他の研究大会での研究発表も促しており、e-mailを活用して、年間を通じて、会員同士で情報や意見の交換は活発に行いました。

## ■テスト研究会■

代表 : 中村優治



## 1. 研究テーマ

今年度は「Scoring validity: Rubrics for integrated-skills tests and rater-related variables」を研究テーマとし、Assessment Literacyなどの新しいテストの考え方を基に、理論、実践の両側面からの情報を考慮しつつ統合的スキル評価のルーブリック（評価基準）の作成を試みた。さらにこのルーブリックを分析・検討し、採点上の妥当性を検証した。

## 2. 活動内容

(1) 上記目標に沿うような形で、下記の言語テスト、アセスメントに関する書籍の読書会を行い、各章について、毎月の例会で担当の委員が発表し、ディスカッションを行った。

・Coombe, C., Davidson, P., O'Sullivan, B. and Stoyonoff, S.(Eds.). (2012). *The Cambridge Guide to Second Language Assessment*.

・Green, A. (2014). *Exploring Language Assessment and Testing: Language in Action*.

(2) 評価に関するワークショップを開催し理論と実践の融合を図った。

学部及び大学院で英語科教育法を受講している学生を主たる対象として9月11日にワークショップを実施した。新学習指導要領の目標の一つである「統合的指導と評価」をテーマに掲げ、アセスメントの基本的な理論、構成概念、評価法、項目分析に関する講義、モデル授業、参加者によるテスト作成とその批評活動及び評価結果の分析を行った。

(3) 学会発表において研究成果を共有し、分析・議論を深めた。

上記読書会、統合的スキル評価に関する職教員へのアンケート分析、毎年開催しているワークショップに関する分析結果をまとめた。さらにTOEFL®、IELTS®、TOEIC®のルーブリックを分析し日本の英語教育に応用できる点を考察した。これらの結果をまとめて、8月にAILA国際大会（ブリスベン）と第19回環太平洋応用

言語学会（早稲田大学）、9月にブリティッシュ・カウンシル主催のシンポジウム（東京）で発表した。

## 3. 今後の活動予定

来年度は以下の2つの課題を設定する。

(1) 「日本の英語教育のための Assessment Literacy の一覧表作成」

(2) 「スキル統合型テストの開発：入学試験での使用についての可能性と問題点」

・JACET 関東（青山学院大学）、JACET 国際大会（鹿児島）、そして JALT2015（静岡）で成果を発表する予定である。

・昨年に引き続き夏に9月にワークショップを開催する予定である。

・来年度も引き続きテスト研究会の年次報告書と Monograph No.3 を刊行予定である。

## ■談話行動研究会■

代表：岡田もえ子

談話行動の比較、異文化コミュニケーション、語用論的視点からの研究をテーマに講師を招き、公開講演会、研究発表会、若手研究者・大学院生による研究発表会を開催した。研究会には会員の積極的参加があった。

[公開講演会]

日時：2014年5月26日（月）17:00～18:30

場所：立教大学池袋キャンパス 14号館 6階

D602 教室

演題：「異文化コミュニケーションにおける沈黙」

講師：中根育子（オーストラリア・メルボルン大学 Senior Lecturer）

[研究発表会]

日時：2014年11月22日（土）16:30～18:00

場所：専修大学神田キャンパス 5号館 541室

演題：「アジア系アメリカ人をめぐる教育言説と『タイガー・マザー』」

講師：井口博充（ウイスコンシン大学マディソン校 Ph.D. (教育社会学)、明治大学・専修大

学・大東文化大学非常勤講師)

[若手研究者による研究発表会]

日時：2015年3月21日(土) 16:00~18:00

場所：専修大学神田キャンパス 5号館 542室

発表者及び演題：

合崎京子(立教大学異文化コミュニケーション研究科博士課程修士課程2年)

「自閉症スペクトラム者の会話の解釈にコンテキストが及ぼす影響—談話分析とフォローアップインタビューを通して—」

小中原麻友(早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程単位取得退学)

“A Qualitative Analysis of Management of Face-Threatening Acts in English as Lingua Franca Interactions”

## ■オーラル・コミュニケーション研究会■

代表：塩沢泰子

今年度、オーラル・コミュニケーション研究会(OC研)には画期的なイベントが2つ加わり、新たな局面を迎えた。1つめは研究会メンバーが指導する学生対象の、ドラマワークショップ中心の合宿である。従来より、OC指導の集大成として、OCフェスティバル(OCF)を実施してきたが、その効果をさらに高め、継続させることが主目的であった。

OC研合宿は文教大学の八ヶ岳寮で8月9日~11日の2泊3日で行われ、参加者は文教、日大、南山、東京工芸の4大学の学生・教員総勢で63名。教員は6名参加し、90分のブロックをそれぞれが担当し、ワークショップ(WS)形式のOC活動を指導した。体や心をとほぐすウォームアップ活動やオーラル・インタープリテーション、小唄、民族舞踊など、活動中の指示はすべて英語でなされ、活気に満ちた発表や交流が見られた。

JACET全国大会ではOC研メンバー3名によるドラマWSを行い、Drama in Educationの一手法であるHot Seatingなどの活用が、批判的思

考を促進し、平和教育につながり得ることをフロアとともに議論した。

12月13日(土)、14日(日)はOC研と親和性の高い学会である、国際表現言語学会(IAPL)と恒例のOCFを、「学習者と教員が共に生きる表現教育」という大会テーマの元、初めて共同開催した。IAPLは言語教育と表現教育を融合させることを追究する学会で、2006年にカナダで発足し、言語教育者のみならず、小・中・高の様々な教科の教員や国際交流等に携わる公務員、NPO職員など多方面の会員を擁する。13日は第19回JACET OCFが中心で、14日はOCFの発表をビデオで振り返りながらのパネルディスカッションや、日本語と英語それぞれの群読のワークショップなど、分野が異なる参加者による、活発な研究発表や実践報告が行われた。

上記に加え、9月から11月にかけては英語学習者を対象としたプロの劇団による英語劇の上演や協働のWSにも関わり、活動の幅を広げている。興味のある方は12月のOCFを是非見学していただきたい。

## ■バイリンガリズム研究会■

代表：河野円

JACETバイリンガリズム研究会は、1996年の設立以来、国内外のバイリンガル教育について広く実態調査をし、2言語、あるいは3言語習得過程について、Cummins(1984)、Baker(1996)、Anderson(2001)をはじめとする理論研究を行ってきました。この数年は、日本の英語教育において論理的思考力を養うことをテーマにカリキュラムデザインや教員、学習者の要因を研究しています。

2014年度は、明治大学中野キャンパス(中野区)や東京ウイメンズプラザ(渋谷区)にて、毎月約1回のペースで研究会を開催しました。活動概要は、PISA型リテラシーを育む英語教育を研究テーマとし、具体的にはPISA型読解力につい

ての文献講読と、高等学校新課程の English Communication I の教科書分析を通し、日本の英語教育で論理的思考力を育てる要因についてディスカッションを行いました。教科書の発問とタスクをアンダーソンのタキソノミーを用いて分析し、さらにそれらの教科書を使用している実際の授業を訪問しました。

成果発表という点で 2014 年度のハイライトが 2 つあります。まず、研究会の中心メンバーが過去 3 年間関わってきた「バイリンガリズムを基盤とする言語教育の研究—CALP の育成を目指して」(科研費基盤 (C) 代表 平井清子) の総仕上げとして、7 月に報告書をまとめたことです。この研究の成果の一部は、8 月に草津で行われた JACET サマーセミナーで紹介いたしました。

もう 1 つのハイライトは、研究会のホームページ開設で (<http://www.jacet-bilingualism.jp/jp/>) ここで研究会のこれまでの歩みや現在の研究、および今後の企画等、様々な情報を日本語、英語のバイリンガルで発信していきますので、ぜひご覧ください。2015 年度は日本の高校での教科書にとどまらず、海外や国際バカロレア、CLIL プログラムなどの中等教育の教材に範囲を広げて、2 言語 (複数言語) と認知発達の関係を追及していく予定です。興味のある方はホームページよりお問い合わせください。

## ■ESP (関東) ■

代表 : Robertson, Charlie

JACET SIG ESP 研究会 (関東) は ESP 領域の研究発表やイベントを積極的に行って、ESP の啓蒙に努力を重ねている。2014 年度の 3 月から 2015 年 1 月にかけては、計 5 回の研究会を実施した。そのうち 3 回は会員の研究発表、1 回は海外からの講演者を招いた。また、今年度の大きなイベントとしては、10 月に JALT West Tokyo Chapter と共催で Micro-conference on Tourism English Education を開催したことである。内部

及び外部からツーリズムに関し 4 人のプレゼンターを迎え盛況に終わった。以上に加えて、2015 年 2 月には電気通信大学 ESP リサーチステーションと協賛し、ESP 国際シンポジウムの運営を行った。このシンポジウムには JACET 会員のみならず、JALT 会員や海外から研究者 60 名ほどが参加した。

また、今年で Vol.16 となる Annual Report を発行した。これには 3 本の論文と 3 本のノート、そして ESP 関東の活動報告がまとめられている。16 号に及ぶ出版を毎年欠かさずに行ってきたのは、歴代の編集委員長をはじめとする編集委員の多大なる努力のおかげで、この出版により ESP の研究発表の場を継続して提供してきている。各例会やイベントについては以下の内容で実施した。

- ・ 2014 年 3 月 8 日 会員発表 青山学院大学相模原キャンパス (B-Building, Room B-303) Science Challenge – a novel language-learning project at Kochi National College of Technology by Michael Sharpe, (高知工科大学)
- ・ 2014 年 5 月 24 日 会員発表 電気通信大学、Tokyo (East 1 Building, Room 705)

Implementing a genre-based ESP curriculum at university by Jie SHI, (電気通信大学)

- ・ 2014 年 6 月 28 日 発表 東京経済大学 (Building 6, Room F-305)

A Review of the Theoretical Origins of English for Specific Purposes by 小野倫寛 (青山学院大学)

- ・ 2014 年 10 月 11 日 マイクロカンファレンス 観光英語教育 JALT West Tokyo 共催

“Micro-conference on Tourism English Education” 玉川大学 (Building 5 Room: B-114)

発表者 :

Travis Cote (玉川大学) : English as a lingua franca and the College of Tourism and Hospitality Management

藤田玲子（東海大学）：Framework for English for Tourism education at a tertiary level

森越京子（北星学園短期大学）：Integrating Hospitality and Tourism Education with English education

高宮暖子（日本コンベンションサービス（株））：Traveling around Japan in English

・2015年1月10日 招待者発表 東京経済大学 (Room F305 in Building 6)

Using student writing and disciplinary expertise to develop an academic writing course by Neil Matheson (University of Auckland, New Zealand)

・2015年2月14日 シンポジウム協賛 電気通信大学

The International Symposium on Innovative teaching and Research in ESP 2015

## ■言語政策研究会■

代表：杉野俊子

### 1. 研究テーマ

2014年度の研究テーマは、

①グローバル化の中で、英語の影響力をどのようにとらえるのか。多言語社会や少数言語とのすり合わせ、英語教育の在り方などを考察していくこと、

②日本および世界各国において、言語と貧困/格差などの言語現象が引き起こす実態を言語と格差の枠組みから考察していくこと、という二点に絞りました。

2013年11月～2015年1月 *English and Development: policy, pedagogy and globalization* (E. J. Erling & P. Seargeant 編)を教材として、言語教育政策に対する理解を深めることに務めています。

### 2. 活動内容

#### (1)月例読書会

工学院大学新宿キャンパスを会場として毎月第3土曜日の月例読書会では、上掲書を丹念に読み進めていきました。各章を、担当者がレジюмеに基づき報告した後、参加者全員で意見交換しました。

#### (2)研究発表

読書会と並行して、会員・非会員による研究発表も8回実施しました。新鮮なテーマによる発表を受けて、活発な質疑応答が毎回なされました。

①「パラオの言語教育と問題点」岡山陽子先生 (4月)

②「ゆるやかな支配とあいまいな共生」黒岩裕先生 (5月)

③「小学校英語の現状と課題」阿部恵美佳 (6月)

④「ベトナムの少数民族の言語と教育の問題」Ho Nguyen Van Anh (7月)

⑤「外国人高齢者のかかえる言語問題—言語権と格差」河原俊昭先生 (9月)

⑥「グローバル人材育成政策から取り残された学生の声」三村千恵子先生 (11月)

⑦「東チモール言語事情」杉野俊子/ジョナス・ヨン学部生 (1月)

⑧「教育改革と言語的弱者—アメリカ教育改革の現状」波多野一真 (3月)

#### 3. 活動の成果

①例会における議論を出発点として、研究会のメンバーが中心となり、『言語と格差—差別・偏見と向き合う世界の言語的マイノリティ』(明石書店)を2015年2月出版

②教材として使った *English and Development: policy, pedagogy and globalization* (E. J. Erling & P. Seargeant 編)を松原氏が中心になり研究会メンバーで翻訳 (春風社より出版予定)

③同じく研究会メンバーを中心に「英語デトックス (仮題)」(くろしお出版)を山本・江田氏が中心となって出版準備中

#### 4. 今後の活動

月例読書会というスタイルを2015年度も継続

していき、また 2015 年 4 月から *Language and Minority Rights* (Stephan May 著) 全章を読破する予定です。また読書会と並行して「言語と矛盾 (仮題)」が杉野俊子と田中富士美・波多野一真両氏が中心となって出版に向けて準備していきます。

## ■言語教師認知研究会■

代表：笹島茂

### 1. 研究テーマ

本研究会の研究テーマは、「日本における言語教師認知研究の理論と実践の確立と実態調査」である。これをもとに本研究会は、「言語教師（主に英語教師）が何を考え、どのような知識を持っていて、どのような理念を持って、どう指導しているのか」を探求することを目的として活動している。言語教師認知 (language teacher cognition) という用語も少しずつ定着し、また批判もあびるようになった。さらに、充実させていきたい。

### 2. 活動内容

本研究会の主活動は研究発表会と称して、本研究について議論を重ねている。また、研究集録『JACET 言語教師認知研究会研究集録 Language Teacher Cognition Research Bulletin』(ISSN 2186-7585) を毎年発行している。冊子は、本研究会のウェブよりダウンロード可能である (<http://jacetsignonlrc.blogspot.com/>)。研究活動の概要はほぼ冊子に詳しく報告している。さらには、有益な言語教師認知に関する情報(文献リストなど) も入手できるようにしている。研究発表会の内容は下記のとおりである。

#### ・第 17 回研究発表会

4 月 19 日 (土) 3 時～5 時 立教大学

Riitta Jaatinen (Tampere University, Finland)  
The Finnish School and Research-based Teacher Education - A Case Study of a Finnish Teacher Education Programme

#### ・第 18 回研究発表会

5 月 24 日 (土) 2 時～5 時 早稲田大学

上野育子 (関西学院大学大学院生) “NNESTs' and Learners' Beliefs about All L2 Use in English Classes”

荊紅濤 (早稲田大学) ”English Teachers' Classroom Practices regarding Global Awareness in a Chinese High School”

#### ・第 19 回研究発表会

7 月 26 日 (土) 2 時～5 時 早稲田大学

長田恵理 (国学院大学) “Teachers' Codeswitching in Elementary School English Classrooms”

林千賀 (獨協大学) 「教員としての自己：事例研究に基づく省察」

#### ・第 20 回研究発表会

10 月 25 日 (土) 2 時～5 時 早稲田大学

吉原令子 (日本大学) ”Narratives of Feminist EFL Teachers' Beliefs and Practices”

都築千絵 (立教大学) ”Students' Self-reflection and Teachers' Motivation”

#### ・第 8 回懇談会

1 月 24 日 (土) 1 時～5 時 早稲田大学

「言語教師認知の研究のこれまでとこれから」

### 3. 今後の活動予定

・研究発表会、全国大会でシンポジウム、研究集録発刊などを予定している。

## ■授業学研究会■

代表：馬場千秋

### 1. 研究テーマ

本研究会は、「大学におけるリメディアル英語授業のあり方」をテーマとしている。少子化、大学全入時代に伴う大学生の学力格差が生じている大学英語教育の現状を踏まえ、学習意欲のない学生や英語を不得意とする学生への対処法とよりよい大学英語授業について探求している。また、「英語授業学」の理論構築のため、文献輪読を行っている。2014 年度よりノエル・エントウイスル著・山口栄一訳 (2010) 『学生の理解を重視す

る大学授業』(玉川大学出版局)を輪読しながら、ディスカッションを行っている。また、会員による授業実践報告も行っている。現在の会員数は15名である。

## 2. 活動内容

・2014年4月26日(土)

於：マイスペース 中野北口店  
輪読およびディスカッション  
レポーター：渡辺勝仁、林千代

・2014年5月31日(土)

於：マイスペース 中野北口店  
輪読およびディスカッション  
レポーター：馬場千秋

・2014年10月11日(土)

於：マイスペース 飯田橋西口店  
輪読およびディスカッション  
レポーター：杉田千香子  
授業実践報告 報告者：油木田美由紀

・2014年12月13日(土)

於：マイスペース 中野北口店  
輪読およびディスカッション  
レポーター：馬場千秋

・2015年2月7日(土)

於：マイスペース 中野北口店  
輪読およびディスカッション  
レポーター：杉田千香子

・2015年3月21日(土)

於：マイスペース 中野北口店  
輪読およびディスカッション  
レポーター：仲谷都

## 3. 今後の活動予定

2015年度は、リメディアル用テキストの分析を行い、その結果を発表していく予定である。また、研究会として、どのようなテキストが望ましいのかを検討し、実際にテキストの執筆を開始する予定である。

## ■教材研究会■

代表：高橋貞雄

### 1. 活動内容

教材研究会は、過去数年にわたって大学生の基礎英語力について調査研究を行ってきました。大学教育の質保証が問われる中で、英語教育は何をどの程度保証すればよいのか、大学の入り口である新入生が英語力の根本である基礎文法(中学生・高校生で学習する文法)をどの程度修得しているのか、またその文法を活用してどの程度のこと出来るのか、といったことを明らかにしたいと考えてきました。本年度は特に「日本文化を発信する」という観点から、基礎英文法の活用のあり方を探りました。日本文化に焦点を当てた理由は、学習指導要領において伝統文化を扱うことが求められているからであり、グローバル化の進展に伴い、学生が海外に出かけていく機会も増えている中で日本のことを英語で適切に伝えられないといったことがしばしば問題になるからです。研究手法としては、大学新入生に対してアンケート調査(テスト)を行い、1)基本英文法を活用して日本文化に関する事柄をどれだけ表現できるか、2)日本および日本文化の何を伝えたいと思うか、といった点を明らかにしました。結果は、本学会の国際大会で発表しました。

### 2. 今後の活動予定

次年度は基礎英語力の保証を課題としながらも、学生の信念“Student Belief”にメスを入れた研究を行いたいと考えています。大学生は、長年英語教育を受けてきた中で、また現在大学において英語の授業を受講している中で「英語」や「授業」にどのように向き合ってきた(いる)かを把握したいと思います。教師には教師の信念“Teacher Belief”があり、学生にとって良かれと思って到達目標を設定したり教材を選定したりしています。つまり、教師はいわばトップ・ダウン的に学生と対峙しているのが多くの場合の現状ではないでしょうか。英語教育の効率を良くし、

授業改善を行うためには、学生たちの視線に焦点を当てるのが大事だと思います。この研究の成果は国際大会での発表を通して、多くの先生方と共有したいと思っています。

### 支部大会運営委員会からのお知らせ

支部大会運営副委員長  
新井巧磨（早稲田大学）

今年も関東支部大会が開催されます。7月12日（日）に、昨年と同じく、青山学院大学青山キャンパスにて行われます。大会テーマは、「Intercultural Diversity of Integrated Learning in English Education」です。今回に限り試行的に、大会参加費を「無料」としております。これを機に是非ともより多くの方々にご参加頂ければ幸いです。

基調講演には戸田奈津子氏をお迎え致します。映画『タイタニック（1997年）』や『アバター（2009年）』など、数々の字幕の翻訳を手がけていらっしゃる字幕翻訳家であり、海外著名人の通訳としてもご活躍されています。また、シンポジウムでは、大会テーマと同じ「統合型英語教育における異文化間多様性」というテーマで、笹島茂先生（埼玉医科大学教授）、塩澤正先生（中部大学教授）、森住衛先生（大阪大学名誉教授）にご登壇頂きます。

さらに、今回はシンポジウムの前に招待講演を設けることになりました。中山夏恵先生（共愛学園前橋国際大学准教授）と栗原文子先生（中央大学教授）をお呼びし、英語教育と異文化間教育についての概念や用語について整理、解説して頂きます。この招待講演は、2015年1月10日に青山学院大学で行われた第5回2014年度青山学院英語教育研究センター・JACET関東支部共催講演会「グローバル時代に求められる異文化間能力—英語授業における現状と課題」で好評を博したものに基づいております。

是非この講演にご参加頂き、その後続くシンポジウムにおきまして、参加者みなさんのご理解やご意見の活性化の一助になればと期待しているところです。

一方、研究発表や実践報告などにもたくさんのご応募を頂きました。厳正なる審議の結果、合計で30件の発表を設ける運びとなりました。昨年同様、賛助会員である企業の方々による賛助会員発表もごさいます。英語教材の活用などを教室を使つての発表という形式でJACET会員の皆様にお伝えして頂きます。

最後にお願ひがございませう。大会運営委員会では、JACET会員の先生方で発表の司会をして頂ける方を募集しておひます。大会終了後には各発表の様子を100～200語程度でおまとめ頂き、そのご報告を次号のNewsletterでご紹介させて頂く予定です。何卒ご協力賜りたく存じます。支部大会プログラムが4月20日頃までにはご自宅に郵送され、関東支部のwebにもアップされますので、ご希望の方は4月末日までに2015年度大会委員長の新井巧磨（tack@aoni.waseda.jp）までご連絡ください。支部大会でお会ひできることを楽しみにしておひます。

### 支部紀要編集委員会からのお知らせ

支部紀要編集委員長  
伊東弥香（東海大学）

関東支部では2013年度より「関東支部紀要（JACET-KANTO Journal）」を発行しておひます。2014年度は第2号発行に向けて、査読者登録、査読審査および編集校正作業を続けてまいりました（2015年3月発行予定）。本号には、特別寄稿として、明石康氏の第8回関東支部大会基調講演（青山学院英語教育研究センター後援）記録、およびOryang Kwon博士の論文を掲載しておひますので、支部会員による投稿・採択論文と併せて

お楽しみいただければと思います。第3号の投稿締切日は7月20日（月・祝）です。皆様の積極的な投稿をお待ちしています。

**事務局だより**

支部事務局幹事

高木亜希子（青山学院大学）

**■青山学院英語教育研究センター・JACET 関東支部共催講演会及び月例研究会開催のお知らせ■**

下記のとおり、共催講演会及び月例研究会を実施いたします。多くの皆さまの参加をお待ちしております。詳細は支部 HP、支部会員 ML でお知らせいたします。

(1) 2015 年度第 1 回共催講演会

日時：2015 年 4 月 11 日（土）16:00-17:30

場所：青山学院大学総研ビル 10 階第 18 会議室

題目：「学校英語教育における CAN-DO リストの課題」

講師：高田智子（明海大学）

(2) 2015 年度月例研究会（5 月）

日時：2015 年 5 月 9 日（土）16:00-17:20

場所：青山学院大学総研ビル 10 階第 18 会議室

題目：「効果的な第二言語語彙学習方法を目指して」

講師：中田達也（4 月より関西大学）

**■住所変更届提出のお願い■**

支部会員の皆様に、支部大会のご案内や支部紀要を確実にお届けするために、転居の際には、[JACET 本部事務局](#)へ住所変更届けを提出してくださいませよう、どうぞよろしくお願ひいたします。

**JACET-Kanto Newsletter 第 4 号**

発行日：2015 年 3 月 31 日

発行者：JACET 関東支部（支部長 木村松雄）

編集者：高木亜希子、下山幸成、斎藤早苗、川口恵子

発行所：〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25

青山学院大学文学部英米文学科

木村 松雄 研究室内